



七夕まつり～過去と今～



陸前高田市では、毎年8月7日に「うごく七夕まつり」が行われていました。陸前高田市高田町内の12集落（大石、森の前、駅前、中央、大町、荒町、鳴石、和野、川原、松原、長砂、沼田）がそれぞれの町内会で車輪のついたうごく山車を製作します。

七夕まつり当日には、山車の上で太鼓を叩き、笛を鳴らし大勢の人で引き、高田町内を練り歩きます。夜には、きらびやかな電飾を仕込んだ山車の装飾にお色直しをし再び高田の町を練り歩きます。



あの日を物語る姿

七夕まつりは、江戸時代より受け継がれてきた伝統の祭りです。その意味は、その年に新盆を迎える方々の霊を弔うためだと言われています。だからこそ、2011年震災の年も、のこった山車で祭りを続け、がれきの街を練り歩きました。町内が会が解散し、住む場所が変わっても続けていく人々の想いがつまった祭りです。



沿道の人々 賑わい 毎年あたり前にやってきた日常がそこにありました。



街は明かりを失い そこには輝く星たちが...

(陸前高田市出身 靴屋のゆきちゃん)

みんなの知恵袋2～災害の経験から～

いのち新聞では、震災時欲しかったもの、あって良かったものなどを話し合う時間が度々あります。シリーズでご紹介しています。

< 衣類 >

大雨や洪水と同様、津波被害でも衣類が濡れると体温が奪われます。

○着替えがない場合は45ℓのごみ袋などを濡れた衣類の上から着ると保温になります。

○フェイスタオル、バスタオルは布団や枕の代わり、上下の下着や衣類の代用としても使えます。

○下着の替えがないときは、女性用生理用ナプキンなどを活用します。

※赤ちゃん、子どものオムツの代用も出来ます。

○「晒」は上記の目的として活用出来るので便利です。

「いのち新聞」へのお手紙や活動資金のご寄付ありがとうございます。

お問い合わせ先

〒024-0024 岩手県北上市中野町2丁目28-23

株式会社 桜内 「いのち」新聞編集部

☆お電話での問い合わせはご遠慮ください。ハガキ又はお手紙で受付けています。

ご支援・ご寄付のご案内

北上信用金庫 東支店 口座番号 0103488

預金種類 普通預金 口座名称 いのち新聞 代表 笹原 留似子

ご支援いただけるスポンサーの皆さまには、活動報告を別資料として報告致しております。ハガキや封書にて住所・氏名・電話番号・メッセージなどをご記入いただき、いのち新聞編集部宛に郵送ください。

東日本大震災 百物語

第2話～何かを探している人～

震災から一ヶ月が経った頃のことだったろうか。小学校6年生の女の子が言った。彼女は、家を津波で失い、大切な家族3人が見つからないと言っていた。地震の後に津波は何度も町を襲い、彼女は山の中へ逃げ、耳に手を当てて津波の音が聞こえないように朝まで耐えたと、話してくれた。夜が明けて、気が付けばお腹が空いていた。何度も町を襲っていた津波が引き、建物が瓦礫と化した町の中を本当のことなのかと目の前の光景を疑いながら呆然としながら歩いていた。食べられそうなものを探していると度々、瓦礫の中に居た遺体と出会った。目をつむりながら「何もしてあげられなくてごめんね」と、遺体を見ないようにして走っていた。袋に入ったままの状態のお菓子やカップラーメンなどを見つけ、空腹をしのいでいたという。もちろん、カップラーメンを食べるためのお湯は無いので、そのまま食べたそうだ。また、次の日もその後何日も同じように過ごしていた。ある日、気が付けば、日が暮れていた。瓦礫が積み重なった日中の町並みと、夜の風景がずいぶん違うことに、彼女は気が付いた。目を凝らして辺りをみると、人影がたくさん動いている。この世の人ではないことを、すぐに感じたそうだ。特に怖いという気持ちも抱かず「何をしているのだろうか？」と、1人の動きをまばたきせずに見つめていた。「あ、何か探しているんだ！」一生懸命何かを探している姿がそこにあった。辺りは暗く、影のようにしか見えないその人の姿に夢中だった。自分はお腹が空いて食べ物を探しているけれど、目の前のたくさんの人たちは、それと同じくらいの気持ちで、何か人生の中で大切だったものを探しているんだな、邪魔をしないで置いてあげよう。そう思った彼女は、そのまま避難所へ帰ったのだと話してくれた。

記事・編集長

知っておきたい<津波のこと>

いのち新聞では経験した災害の過去から、時間の経過と共に共有し、振り返る時間が多くあります。パネル展ではその1つ1つを皆でまとめました。その中から「津波」を紹介します。

<津波>

津波が来たのは地震から2.5分後位。

高さ



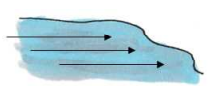
17m～40m以上

重さ



1000t以上

速さ



速いところで
100km以上

「津波の場合は地震が止む前の揺れている最中から避難しなければならないよ。(大槌Oさん 80歳・女性談)」先人の教訓には、理由がきちんとありました。「津波のこわさを意識し手に減災につなげる」Oさんの言葉は深い言葉でした。